

「図工が好きな子・嫌いな子」というキーワードで、このサイトへのアクセスされる人がいる。これについて自説を論じてみたい。

好きこそものの上手なれ

「好きこそものの上手なれ」ということわざがある。(有名なんで皆知っている)ところが、ある小学5年生の男の子がこう言った。

「先生、知ってる？『好きこそものの上手なれ。』っていうことわざ。」

「嫌いなものは下手だってこと。」

「僕は勉強が嫌いだからできないんだ。」と。

その言葉を聞いて、はっとした。

「そうか！嫌いなものは伸びないんだ。」

「嫌いだから伸びない。」

「まずは好きにならないと伸びないってことか。」

絵が嫌いな子は、絵が上手になれない。

だから、また好きになれない。

堂々巡りのスパイラル。

同じことは、算数にも体育にも言える。

幼少の頃の手の巧緻性などは、大して差が無い。

そして、後述するが、芸術的才能は、実は遺伝的・先天的なものではない。

そう考えると、絵が嫌いな子の理由は、絵が下手なことではなく、幼少の頃、何かしら「嫌い」になる理由付けがなされたと考える方が妥当なのだ。

それは、たぶん親が芸術や絵が嫌い、「お前も俺の子どもだから。」とか「お前は絵は不得意だ。」と呪縛をかけた可能性が高い。

幼児のほとんどは、何かをつくるのが無条件に好きであり、子どもにとっては、自分のつくったものに対する大人の評価は、全く関係ない。

幼児の場合は、作品の良し悪しという概念はあまり無く、自分で「つくったこと」それ自体が嬉しいのである。

ところが、それに対して「もっとこうしろ、ああしろ。」とか「この色を売ればよかったのに。何でこんな変な色を使うの。」「やっぱり血は争えないのね。」とかいった言葉をまわりがあびせることにより、子どもは「描くこと」や「つくること」いやがるようになっていく。

「描くこと」や「つくること」を嫌いになったら、上手になれない。

冒頭の「好きこそものの上手なれ」の鉄則があるからである。

図工嫌いの原因は、親の考える図工・美術の必要性・重要性によることが大きいのだ。

言うまでも無いことだが、前述のように、このような子どもに対して、図工・美術の担当教師が「できないこと」を叱れば、その子はますます「描くこと」や「つくること」をいやがるようになる。

写実的に描かせることは可能。しかし、それでは子どもは(以外に)喜ばない

中学校の美術教師時代、私は「絵が下手だから嫌いなのではないか。」「では、写実的に

できるようになると美術が好きになるのではないか。」と考え、徹底的に写実的描法を授業で教え込んだことがあった。

一つの作品に要する時間はかなりかかったが、写実的に描かせることに成功した。

ところが、生徒自体は、技能が付いたことにそれほど喜びはしなかった。

写実性かどうかや絵の上手い下手というものは、子どもの表現の喜びとはあまり関係ないのである。

なぜ、私は絵が得意になったのか(先天的・遺伝的では無い理由)

実は、私の父親は絵が得意である。

商業デザインもやっていたことがある。

しかし、それでも私は、芸術的才能は先天的・遺伝的では無いと思える。

小さいとき(3歳か4歳の頃)、私の祖母が新聞のチラシの裏に絵描き歌のような感じで鳥とかと描いてくれていた。

私はそれがおもしろくて、それをまねて新聞のチラシの裏に描いていた。

それを祖父は、孫が描いた絵だというんで、それを持って町内じゅうに見せてまわった。

それが私には嬉しくて(祖父が喜んでくれるから)絵を描いていた。

そして、かたくなに周囲の右利きへの矯正を拒み、左利きを貫いた。

右ではうまく絵が描けないからだ。

しかし、父は、特に絵を教えてくれたわけではない。

たまたま、幼児の私に絵の具を扱わせてくれたが。

ただ、父が商業デザインを学んでいたせいもあり、家の中にはデザインとか美術関係の書籍が多くあった。

私は(意味はわからないが)、それを見ているのが楽しかった。

そうこうしているうちに、幼稚園を卒園する頃には、絵が好きで、得意な子どもになっていた。

こう考えると、美術の才能には、遺伝や先天ではなく、親や親族の価値観とか環境が影響していると思える。

音楽家の家系に音楽家が多いのは、家の中にピアノがすでにあり(当然、音楽関係の書籍物もあり)、親が音楽が好きで、よく歌ったり演奏していたであろう環境にあったから、子どもも音楽家になるのではないか。

国語や英語・社会などの文系が得意な子どもの部屋には、小さいときから買ってもらっている童話や児童文学が本棚に並んでいる。

家の中にも、本が多い。

本に価値を見出しているのも、むやみに捨てたり売ったりはしないのだ。

親も本を読むことが好きであり、クリスマスプレゼントなどには、児童書をプレゼントする。

これとは逆に、国語や社会が嫌いな子どもは、文章を読むことが苦手であり、本も読んでこなかったし、本を買うくらいなら他のものを買うという価値観さえ持っている。

本棚はあっても本が並んでいない場合もある。

春休みに、教科書とか資料集とかといっしょに捨てていたりする。

親子ともども、本に対する価値観が低いのである。